

C年復活節第5主日 ヨハネ13章31—35節

〔直訳〕

31 それで彼が出て行ったときに、

言う イエスは、

「今や 栄光を与えられた 人の子は、

そして 神は 栄光を与えられた 彼において。

32 「もし 神が 栄光を与えられたなら 彼において、」

そして 神は 栄光を与えるだろう 彼に 彼において、

そして すぐに 彼は栄光を与えるだろう 彼に。

33 子たちよ、なお 少し あなたがたと一緒に 私はいる。

あなたがたは捜すだろう 私を、

そして とおりに 私が言った ユダヤ人たちに 次のことを

『私が立ち去るところへ あなたがたは できない 来ることが』と、

そして あなたがたに 私は言う いま。

34 新しい掟を 私は与える あなたがたに、

ようにと あなたがたが愛する 互いを、

とおりに 私が愛した あなたがたを

ようにと あなたがたがもまた 愛する 互いを。

35 このことにおいて

知るだろう すべての人は 次のことを

私にとつて 弟子で あなたがたはある、

もし 愛を あなたがたが持つなら 互いにおいて」。

〔新共同訳〕

31 さて、ユダが出て行くと、イエスは言われた。「今や、人の子は栄光を受けた。神も人の子によつて栄光をお受けになった。32 神が人の子によつて栄光をお受けになったのであれば、神も御自身によつて人の子に栄光をお与えになる。しかも、すぐお与えになる。33 子たちよ、いましばらく、わたしはあなたがたと共にいる。あなたがたはわたしを捜すだろう。『わたしが行く所にあなたたちは来ることができない』とユダヤ人たちに言ったように、今、あなたがたにも同じことを言うておく。34 あなたがたに新しい掟を与える。互いに愛し合いなさい。わたしがあなたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。35 互いに愛し合うならば、それによつてあなたがたがわたしの弟子であることを、皆が知るようになる。」

①構成

① a 31—32節

この段落では「栄光を与える（ドクサゾー）」が5回繰り返される。31節では「人の子は栄光を与えられた」と「神は栄光を与えられた」というように、過去時制を使って、人の子と神とが互いに栄光を与え合ったことが書かれている。32節でも、まず「神が（人の子によって）栄光を与えられたなら」とあって、「神は与えるだろう」と述べており、ここでも人の子と神とが互いに栄光を与え合うだろうと語られている。人の子は受難の死によって栄光を与えられ、神も栄光を与えられる。人の子と神とが行う栄光の相互授受は神の自己啓示にほかならない。

① b 33節

ここではイエスの「不在」が述べられる。ユダヤ人の前からも、弟子たちの前からもイエスは姿を消す。「あなたがたは私を捜すだろう」とあるように、ユダヤ人はイエスを捜そうとはしないが、弟子たちはイエスを捜す。

① c 34—35節

「愛する」と「愛」とを繰り返すこの段落では、新しい掟が相互への愛として示される。そして、この相互愛が弟子たちの特徴となり、ほかの人たちから彼らを分けるしるしとなる。相互愛が可能なのはイエスが模範を示しているからである。

②行き交う栄光（31—32節）

① a ヨハネ福音書13章31節—16章33節は「告別説教」と呼ばれ、十字架での死を控えたイエスが弟子たちに語った言葉がまとめられている。その冒頭となる31節は「彼が出て行ったとき」で始まる。ここでの「彼」はイエスを裏切るために出て行ったユダを指す。ユダが去って行く情景を30節が描いており、「ユダはパン切れを受け取ると、すぐ出て行った。夜であった」と述べている。彼が出て行ったとき、イエスは「今や、人の子は栄光を与えられた」と宣言する。ユダが出て行った時からすでに、受難は始まっている。なぜなら、ユダはサタンの業を行うために出て行ったからである（27節参照）。

① b イエスは裏切られて十字架に上げられるが、それはイエスに「栄光」が現される時である。受動形「栄光を与えられた」が使われているが、これは神が動作の主体であることを婉曲的に表す神的受動形であるだろうから、神がイエスに栄光を与えたことになる。これに続いて、「神は彼（人の子）において栄光を与えられた」と述べている。受難によって神から人の子に栄光が与えられ、それによって人の子から神に栄光が帰せられる。「栄光」が神と人の子の間を行き交っている。31節の二つの「栄光を与えられた」はいずれもアオリスト形（過去に非継続の動作があったことを述べる時制）である。

① c 神とイエスの間を行き交う「栄光」は32節でも述べられている。一行目では31節四行目の表現が繰り返されているが、条件文の形を取っており、その帰結文は二・三行目である。ただし、動詞が未来形になっているから、ここでの栄光は将来に現れる栄光である。

① d 人の子と神とが行う栄光の相互授受は31節では過去のこととして書かれている。ヨハネ福音書においては確かに、「十字架に上げられる」と「栄光に上げられる」ことは同義的に考えられているが、ここでは、切迫しているとは言え、受難そのものはまだ未来のことである。その意味

では、ここですでに「栄光を与えられた」と表現することは、物語の時間的流れに即していないことになる。現に32節では同じことを「栄光を与えるだろう」と未来形で表現している。

◎このような時制の「矛盾」はヨハネ福音書の特徴である。そしてこの「矛盾」は実はヨハネ福音書全体が直線的ではなく、円環的に展開していることに拠っている。すなわち、ヨハネにとって、「人の子イエス」は物語のどの時をとつても、「栄光に上げられた」キリストであり、十字架以前の「人の子イエス」の中にも「栄光に上げられたキリスト」の姿が映し出されている。ヨハネは直線的な時間展開を持つ福音書という文学様式を用いながら、円環的な時間認識をもって全体を構成している。ヨハネが示す「今」は、物語の「今」であると同時に、ヨハネが生きている「今」でもある。そしてそれはまた、ヨハネ福音書を読むキリスト者が生きている「今」でもある。

①ヨハネは福音書を書くとき、描写の視点を自由に変えている。この箇所でも、事件の起こった時点に基準を置くと、十字架とその栄光はまだ未来のことになる。しかし、福音書を書いている時点から見ると、それはすでに実現した出来事である。父はイエスの生涯を通してイエスの栄光を現し、イエスは父への従順によって父の栄光を現す。互いに行き交う「栄光」の頂点が十字架に置かれている。ユダが夜の闇に出て行くことによって、この十字架という栄光が闇の中に輝き出す。聖書の語る栄光は自己実現の栄光とは正反対である。人間は自己の栄光を完全に捨て去ることができないが、イエスは十字架に自らを捨て、父は十字架に独り子を投げ出す。ここに神の栄光が現れる。

③別離の予告（33節）

①「イエスは「子たちよ」と呼びかけて、弟子との別れを予告する。「子たちよ」は文字通りには「小さな子たちよ」の意味であり、ヨハネ福音書ではここにしか見られない。1章12節、11章52節では「子」を意味する別の語が用いられている。「小さな子たちよ」は、弟子や信仰上の子どもに対する呼びかけとして用いられるが、世を去ろうとしている族長がその子孫に語りかける告別説教の類型から導き出されたのかもしれない。

②「ユダヤ人」という語は、ヨハネ福音書では単純な民族名としてではなく、むしろイエスやイエスを信じる者に対する「敵対者」や「迫害者」の意味で使われることが多い。9章22節からうかがえるように、ヨハネ福音書を生んだ一世紀末のヨハネ共同体はユダヤ教と抗争関係にあり、それゆえヨハネ福音書では「ユダヤ人」はしばしばイエスを信じる者にとって恐怖の対象として描かれている。

③「ユダヤ人たちに言ったとおりに」は、7章33―34節、8章21節を指している。「立ち去る（ヒュパゴー）」と表現は、7章33節、13章3・36節などにも見られ、イエスの死についてのヨハネ特有の理解を示している。ヨハネにとって、イエスの死は滅びではなく、世を去って、父のもとへ「行く（帰る）」ことである。

④イエスは「ユダヤ人」に予告したように、「立ち去る」。弟子も「ユダヤ人」もそこへ行くことはできないが、弟子は「ユダヤ人」とは違って、イエスを「捜す」ことになる。イエスを敵視する「ユダヤ人」は、立ち去ったイエスを捜しはしない。しかし弟子たちはイエスを捜し、復活したイエスに出会う。その時、この別離の悲しみは喜びへと変えられる（一六22）。弟子たちはイエ

スの受難を前にして、確かに闇に覆われる。しかしそれは終わりのない闇なのではない。弟子たちは捜し求めるなら、イエスに出会えるという希望を持つことができる。

④「新しい掟」の授与（34―35節）

① イエスは別離の予告をしたすぐ後に、弟子たちに「新しい掟」を与える。つまり、この掟はイエスから与えられた厳粛な遺産である。この段落では、「互いを愛する」ことが「新しい掟」として語られる。「掟（エントレー）」は動詞エンテッロー（命じる）の名詞形である。ギリシア・ヘレニズム世界では、王あるいは公的役人による「命令」、教師の「教え」など、人間の「戒め」を意味することが多い。新約聖書では、同様の用法も見られるが（ヨハ1―57）、ほとんどは神によって与えられた「命令」、すなわち神の「掟・律法」を意味する。共観福音書ではルカ15章29節を除いて、もっぱら「律法が求める掟」を意味し、その価値や有効性が疑問視されることはない。これに対して、ヨハネ文書ではこの語によって「モーセの律法」が表されることはなく、むしろイエスに対する神の「命令・指示」や弟子に対するイエスの「戒め」を表している。

② 隣人愛はモーセの律法においても宣言されている（レビ19―18）。律法の掟はモーセに与えられ、その権威の根拠もモーセにあった。しかし、イエスが与える掟には、まったく新しい意味がある。それは、互いに愛し合うべきことの理由が「私があなたがたを愛したとおりに」と、イエスを根拠として示されていることである。「新しい掟」の権威の根拠はイエスである。「互いに愛し合う」ことそのものは新しくはない。新しさとは、十字架に命を投げ出すほどに「あなたがたを愛した」方に根拠を持つ新しさである。

⑤イエスの弟子であることを示す

① 受難を前にしたイエスが弟子たちに新しい掟を与えたことが、「ユダの裏切りの予告」（21―30節）と「ペトロの離反の予告」（36―38節）の間に描かれている。「ユダはパン切れを受け取ると、すぐ出て行った」（30節）。こうして受難の時が始まるが、その「時」は「夜であった」（30節）と、ヨハネは象徴的かつ劇的に語る。この「夜」のただ中で弟子たちに与えられる新しい掟とは、「私があなたがたを愛したとおりに、互いに愛し合いなさい」（34節）ということである。キリストの愛に支えられた相互愛こそが、この「夜」から身を守ってくれる。それは受難を前にした弟子たちへの教えであり励ましであると同時に、敵対する「世」||「闇」に直面しているヨハネ共同体（ヨハネが属している教会）の信者へのそれでもある。

② やがてイエスが立ち去り、弟子たちは闇に囲まれることになる。しかし、弟子たちは、この「愛」をもって闇に立ち向かうことができる。イエスの十字架には、栄光と愛が輝いているからである。キリスト者はその光を反射させる道具となり、世に向けてそれを示す。愛は、イエスの死によって開始され、世に対して宣言される「新しい」時代のしるしとなる。

③ イエスは自己を十字架の上に捨て去るが、その愛のなかに栄光が輝く。だから栄光と十字架の愛とは表裏一体である。父と子は十字架と復活によって愛が何であるかを示す。弟子たちがこの愛に立って互いに愛し合うとき、キリストの栄光が照らし出される。キリスト者はこの栄光をもって、闇の世を照らす。それを見る者は、キリスト者がイエスの愛を受け継ぐ弟子であることを認めることになる。